

「日毎の糧を与える神は」

コリントの信徒への手紙2 9:10

2025年11月23日
野村 友美 師

<収穫感謝礼拝によせて>

11月の第4週目の日曜日、今日の礼拝は収穫感謝礼拝です。

神様が私たちに与えてくださっている恵みに改めて心を向けて、感謝を捧げるために、キリスト教会では毎年この時期に収穫感謝の礼拝を行なっています。収穫を喜んで感謝して、次の年にも収穫があるように願う祭りは、国や宗教に関わらず世界中で行われていますよね。

キリスト教会の収穫感謝礼拝は、ピューリタンと呼ばれる教派の伝統が元になっています。17世紀の初め、ピューリタンの人たちは信教の自由を求めて、イギリスからアメリカに渡りました。メイフラワー号という船でアメリカのプリマスにたどり着いたのですが、新しい土地での生活は大変で、最初の冬の間に半分ぐらいの方が命を落としてしまったそうです。ですが先住民族の方々に助けられて、土地に合った作物の作り方を教わって、残りの人たちは何とか生き延びることができました。そして次の年の秋には、たくさんの収穫を手に入れることができたのだそうです。

ピューリタンの人たちは、与えられた恵みを神様に感謝して、助けてくれた先住民族の方々と一緒にお祝いしました。この出来事を記念して、神様の恵みを喜び祝って分かち合う日として、収穫感謝の礼拝が定められたのです。

収穫感謝礼拝に限らず、私たちは毎週の礼拝

のたびに、主の祈りで「日用の糧を今日も与えたまえ」と祈っています。

日用の糧、つまり日毎の食べ物を、今日も私たちに与えてください。

そう祈ることで、一日一日を神様からの恵みによって生かされているのだと思い起こすためです。

もちろん、だからといって私たちが何もなくても天からパンが降ってくる、なんていうことはまずないでしょう。私たちはそれぞれの状況の中で、日毎の食べ物や生きるのに必要なものを得るために、それぞれのやり方で頑張っています。

それでも、やっぱり自分の力だけで生きているわけではないでしょう。

私たちが生きているこの社会は、いろんな方々のいろんな働きによって支えられています。人の力だけじゃなくて、私たちの食べ物は自然の力にも左右されるものです。今年は異常な暑さと雨が少なかった影響で、広島の特産品が大変なことになっていると、皆さんもニュースで聞いておられることと思います。牡蠣に限らず、野菜や果物や米なんかも、やはり異常気象の影響を受けています。それは、本来の自然環境によって、私たち人間の食べ物が守られていたということを示しているのではないのでしょうか。

私たちはみんな、私たち自身の力を越えた働きによって、日々生かされているんです。そもそも今朝目が覚めて、体が動かしていることだって、決して当たり前ではありません。神様は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる御方だと、聖書は証言しています。

生きとし生けるすべてのものが、神様の力

によって生かされている。

すべての人が神様から愛されて、必要を満たされて、命を養われている。

この恵みを知っている者の共同体として、教会は「日用の糧を今日も与えて」くださる神様に感謝を捧げて、共に祈っているのです。

それだけではありません。神様の愛と恵みに生かされている者として、人を愛して恵みを分かち合うようにと、私たちは日々それぞれの日常へ送り出されています。

このことを、今日の聖書の言葉は改めて私たちに伝えているのです。

<コリントの教会に宛てた手紙>

新約聖書の、コリントの信徒への手紙。

今日一緒に読んでいるのは、2通ある手紙のうちの2通目の方です。コリントは古代ギリシアの港町で、貿易の拠点の一つとして発展していました。経済的にそこそ豊かで、人の出入りが多い商業の町だったコリントは、賑やかで華やかで、だからこそ誘惑も多い場所だったようです。そんなコリントの町に、パウロはイエス・キリストの救いを宣べ伝えて、教会を作りました。コリントの教会の人たちは、そのほとんどがユダヤ人ではなくて、コリントの町で生まれ育った人々でした。彼ら彼女らはパウロたちを通して、イエス・キリストという存在に出会い、この世界を創られた神様の愛と憐れみを知って、信仰を持つようになったんです。

コリントの教会には裕福で社会的な地位が高い人もいれば、貧しい人や、奴隷の身分だった人もいました。立場も価値観もそれぞれに違う人たちが集まって、ひとつの共同体を作っていたのですから、それなりにいろんな問題も起こったんでしょう。

社会での習慣や力関係を教会の中にも持ち込

んだり、派閥に分かれて争ったり、知識をひけらかして威張ったりと、なかなか大変だったことが手紙の内容からも伺えます。

特に1通目の手紙の方でパウロは、信仰者としてどう振る舞うべきか、教会とはどういうものかを具体的な言葉で伝えて、愛の大切さを繰り返し語っています。

「信仰と、希望と、愛、

この三つは、いつまでも残る。

その中で最も大いなるものは、
愛である。」

(1コリント13:13)

この言葉はとてもよく知られていますね。教会にとって何よりも大切なのは「愛」だと力説しなくてはいけないぐらい、パウロはコリントの教会に手を焼いていたんです。問題だらけで決して理想的な教会とは言えない、そんなコリントの教会の人たちに、パウロはひとつの頼み事をしています。それは、イスラエルの首都エルサレムの教会を援助してほしい、という頼み事でした。

どうやらエルサレムの教会は、経済的にかなり苦しかったようです。

イエス・キリストこそメシア、救い主だと信じるキリスト教徒たちは、他のユダヤ人たちからは異端だとみなされていました。

そもそもパウロだって、最初はキリスト教徒たちを迫害していた側の人だったんです。ユダヤ教の中心地とも言えるエルサレムで、キリスト教会に属する人たちは、ユダヤ人のコミュニティから孤立していたんでしょう。貧しい人々への援助は律法で決められていましたが、キリスト教徒だからという理由で、それを受けられない人たちもいたのかもしれない。

れません。何にしても、エルサレム教会は援助を必要としていました。

それでパウロはコリントの教会の人たちに、エルサレムの教会を助けてあげてほしい、と頼んでいるのです。それにしたって、自分たちの問題も山積みの人々に「他の人を助けてあげてほしい」なんて、ちょっと無茶な頼み事のように思えます。

まずはコリントの教会の未熟さや欠点を改善させて、ちゃんとした信仰者に育てて、人助けはそれから、というのが自然な順序なのではないでしょうか。でもパウロは、そうしませんでした。それはそれ、これはこれ、ということではなかったでしょう。

ユダヤ人のパウロにとっては異邦人たちで、しかも何かと手がかかるコリントの教会よりも、エルサレムの教会の方が大切だった、というわけでもありません。

だったら、どうしてパウロはよりによって、問題だらけのコリント教会の人たちにそんな頼み事をしたんでしょうか。

その答えは、今日の言葉の直前にパウロが語っていました。

「神は、あなたがたが
いつもすべての点ですべてのものに
十分で、あらゆる善い業に
満ちあふれるように、
あらゆる恵みをあなたがたに
満ちあふれさせることが
おできになります。」

(2コリント9:8)

<日毎の糧を与える神は>

どんなに未熟で、問題だらけでも。
神様が必要なすべてを与えて、善い業へと送り

出してくださる。そのためのあらゆる恵みを、神様が満ちあふれさせてくださる。

この確信が、パウロの心にはありました。同じ手紙の中で、パウロは伝道者としての自分自身について、こんなことを言っています。

「ところで、わたしたちは、

このような宝を土の器に納めています。

この並外れて偉大な

力が神のものであって、

わたしたちから出たものでないことが

明らかになるために。」

(2コリント4:7)

私だって脆くてデコボコで見栄えもしない土の器だけど、イエス・キリストを宣べ伝えるために必要な力を、神様がくださっている。

何よりも素晴らしい宝物、神様からの愛と救いを手渡すための力は、私じゃなくて神様から出たものだ。

この証言のとおり、パウロは自分の内側で働かれる神様の力を実感していました。

パウロ自身に必要な分だけじゃなくて、他の人々とも分かち合えるぐらいに、神様からの恵みが満ちあふれることを、パウロは体験として知っていました。どんなに不格好な土の器にも、神様は恵みを満ちあふれさせることがおできになる。私がどんなに不完全でも、神様の恵みは私を超えて満ちあふれて、他の人たちと分かち合う力を与えてくださる。

だからあなたたちも、とパウロは自分の体験をもとにして、コリントの教会の人たちを励ましているんです。

種を蒔く人には種を与え、パンを糧としてお与えになる方。神様が私たちに、生きるために必要な恵みを与えてくださっている。

日毎の糧を与えてくださる神様に、私たちの命は養われているじゃないか。そう言って、パウロは神様の恵みの確かさを改めて思い出させます。

そしてその恵みを分かち合うように、コリントの教会の人たちに勧めています。神様があなたたちに与えてくださった恵みは、あなたたちだけで終わるものではない。

蒔かれた種のように、神様の恵みはあなたたちを通して増え広がって、慈しみの実を結ぶものなんだ。

そうパウロは宣言しているのです。

コリントの教会の人たちに与えられた恵み。その命を養って生かしている日毎の糧は、食べ物だけではありませんでした。

悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。そんな神様の恵みの最たるものが、パウロから伝えられたイエス・キリストの出来事でした。

独り子の命を犠牲にしてでも、すべての人を罪と死から救い出そうと決断された

神様の愛に、コリントの教会の人たちは確かに救われて、生かされたんです。

同じように、今日こうしてパウロの宣言を聞いている私たちも、神様の恵みに命を養われて、神様の愛によって生かされている一人一人です。

種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる神様は、私たちに必要なすべてを与えて、私たちを善い業へと送り出してくださいます。

私たちがどんなに未熟でも、不完全でも、神様の恵みは私たちを超えて満ちあふれて、他の誰かと分かち合えるようにしてくださいます。

「このような宝を土の器に納めています」と証言したパウロのように、私たちもまた神様の力に動かされて、人を慈しむ実を結ぶことができます。

それは人の目に留まらないぐらいの、小さな実りかもしれません。

誰かのために祈ることだったり、ささやかな親切だったり、ひと言の温かい言葉を差し出すことかもしれません。

何も言えないままで、ただ誰かの側にいることかもしれません。

それでも、種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、私たちに愛の種を与えて、それを増やして、私たちの小さな慈しみを成長させてくださいます。

私たちがあらゆる善い業に満ちあふれるように、神様はあらゆる恵みを私たちに満ちあふれさせることができる御方です。

このパウロの確信に励まされて、神様から与えられている恵みに感謝して、その豊かさを他の誰かと分かち合ってまいりましょう。

神様からの愛を受け取った者として、目の前の誰かを愛して慈しむことができますように。

小さな私たちの言葉と行動と意思を通して、神様の愛と救いが広がっていきますように。

それぞれの土の器に、神様の力が豊かに働いてくださることを祈りながら、今日もここから送り出されていきましょう。

お祈りいたします。